

「学習する組織の安全文化醸成活動のコンセプト」の Web 教材集閲覧のまとめ

伊藤京子

表題の Web 教材は、「原子力組織の“学習する組織”による安全文化醸成」プロジェクト（原子力安全基盤機構公募研究、平成 18-20 年、研究代表者 杉万 俊夫 京大教授）の一環で試作した。この Web 教材は、現在の原子力発電を巡る社会的動向を 4 つの観点から解説したもので、平成 21 年 8 月まで次の URL で閲覧可能である。

<http://hydro.energy.kyoto-u.ac.jp:80/hiyari/test/index.php>

（注：現在は Web 教材への感想投稿やハットヒヤリ事例データベースへのアクセスはできません）。

この Web 教材集を、平成 20 年度に実際の原子力組織の現場の方々に被験者として閲覧頂き、感想を寄せていただいた。その閲覧結果を別表に示す。別表では、教材の各ページに含まれる文字数、図表の数、及び閲覧者の平均閲覧時間、最大時間をまとめている。

各ページの閲覧時間は業務中の閲覧のため、全体として 2～3 分までが多く、ざっと内容を見渡した様子が見受けられる。閲覧者によっては、原子力の受容、社会との関係などの閲覧時間が長い。閲覧者が仕事で直接関わっている分野と関係し内容が把握しやすい部分の閲覧時間が比較的長い様子が見受けられる。

閲覧者の感想として、教材が「難しい」との複数のコメントに加え、原子力問題に対する意見が挙げられた。意見の内容は、社会との関係、情報公開の必要性、情報提供の内容、責任の所在など、原子力を取り巻く環境に対するものであった。

「難しい」とのコメントは、現在関わっている仕事と直接的な関連のない概念的内容を、文字中心の教材で提供しても、読むほうには時間不足と説明不足、そして学習に対するモチベーションが不足では折角作った教材も読んでもらえないことを示す。一方、原子力問題に対する意見からは、原子力を取り巻く状況の変化への対応や一般の人々の理解を求め必要性などに、現場の方々の問題意識が伺えた。Web 教材による知識提供が、普段の問題意識を表明するきっかけとなった様子が見受けられた。

現在、科学技術問題に関わる研究者や研究機関が、広く一般の人々にその成果や意義を伝えるアウトリーチ活動が重要視されている。今回の Web 教材は、原子力を取り巻く状況を、技術の社会との関係を、安全、安心、共生の観点からまとめたものである。教材に対する意見から、実際に現場に携わる方々が原子力組織への理解に向け、一般の人々に対して、メリット・デメリットを併記した、説得力があり、理解が容易な情報提供が必要と考えている様子が見受けられた。

Web 教材の今後の課題として、短時間でポイントを伝え、内容への興味を惹くメッセージ性向上と読者との双方向交流機能の組み込みが挙げられる。

別表 Web 教材の内容と閲覧時間

ページ	内容	文字数	図	表	平均閲覧時間[秒]	最大閲覧時間[秒]
トップページ		262	0	0	13	75
目次		426	0	0	8	20
はじめに		365	0	0	54	444
第1話	社会の安心	947	0	0	72	385
	技術安全	1369	1	0	142	838
	安全とリスク	1087	1	0	79	206
	学習する組織	2668	1	0	177	673
	具体的イメージ	2240	3	1	114	459
	社会の安心まとめ	339	0	0	10	45
第2話	原子力の共生	490	0	0	29	167
	原子力の受容	3145	0	0	102	484
	社会と原子力	3365	1	0	61	528
	原子力世論	799	0	0	22	152
	原子力共生学	654	0	0	12	106
第3話	プルサーマル	1774	0	0	42	149
第4話	共生のHI	272	0	0	6	31
	共生の概念	640	0	0	18	98
	Eラーニング	3821	1	0	93	433
	社会実験	1527	0	1	50	209
	共生のまとめ	207	0	0	7	22